

猿楽「日吉座」考(上)

| | |
|-----|---|
| 著者 | 片桐 登 |
| 雑誌名 | 能楽研究 : 能楽研究所紀要 |
| 巻 | 6 |
| ページ | 153-182 |
| 発行年 | 1981-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/00020302 |

猿楽「日吉座」考（上）

片桐 登

はじめに

法政大学能楽研究所の鴻山文庫所蔵本のうちに、『仕舞秘伝』と題する江戸時代中期の筆写本がある（整理番号、付265）。小型の横本二冊（二帙）で、奥書などはないが、原本は正徳二年（一七一二）九月に武井斎宮氏春から勢州山田の久保倉右近と同伊織の兩人に相伝した伝書で、そのほぼ二十年後の享保一六年（一七三一）頃に、日吉弥四郎氏泰が伊織から原本を借覧し、改めて書写したのが本書であるらしい。乾冊は能の秘書全般にわたる口伝秘伝の書き留めであり、坤冊もまた翁と三老女とを含む秘曲七番の詳細な型付を記したものである。各流派の演出の相違などにも少なからずふれており、氏春の記事そのものが詳細であるうえに、筆写した弥四郎もまた研究熱心で筆まめだったのだろう、自ら修得し見聞したことがらを、紙片に細字でびっしり書き込んで貼付しはさみこんであって、当代演出の実態と変遷の一端を知ることができる。もちろん、当面の調査の対象である日吉に関して、記事中の随所に、日吉姓の役者名——日吉松雪・権太夫・氏喬・氏

春——が記されていて、その具体的な活動を、一部ではあるが、把握することもできるし、当時の日吉が宝生流系であつたらしいことも分るなど、日吉一座の研究には有益な書物である。

江戸時代中期の日吉については、後に改めて言及することになるので、本書の日吉関係の記事資料はその時に示すことにするが、いまここでその一つだけを記して次へ進むためのきっかけにしておきたい。

本書坤冊のうちに収められている能「石橋」の秘事相伝の記事の末尾には、原本の奥書がそのまま写されており、それは次のようになっている。

〈前部略〉

右之通一番ノ伝授 御合点可_レ有候 以上

近江坂本日吉山王楽頭秦川勝ヨリ卅三代

日吉弥右衛門氏春夏

武井斎宮氏春判

正徳二壬辰歳九月四日

久保倉右近殿

久保倉伊織殿参

右によれば、本書所収の諸秘事を伊勢国山田の久保倉（姓からみて伊勢神宮の神職か。未調査。）両氏へ伝えた武井斎宮氏春は、日吉山王の楽頭秦川勝の流れをくむ日吉弥右衛門その人だ、というのである。秦川勝を猿楽の遠祖とするのは古くからある考えで、世阿弥の『風姿花伝』第四神儀にも書かれていて良く知られてはいるが、もとより後世の付会で信ずるに足るものではなく、川勝より三十三代の後裔と称するのもまた、いたずらに家の歴史と権威とを誇示せんがための自称に

すぎないことは明白であろう。しかし、ここに書かれている日吉弥右衛門という名前は注目に値する。能の歴史に関心を持つ、多くの人が思い浮かべるに違いないが、近江猿楽と丹波猿楽と両系統ある——或は宇治猿楽にもあったかも知れない——日吉座のうち、丹波日吉座の流れを汲む、有力な一系統を代表する名前が、実は、日吉弥右衛門なのである。早く十六世紀のなかばには狂言役者の一人としてこの名前が見えており、丹波日吉座の一員として、松尾御霊社の祭礼猿楽に参勤していることが分っている。以後は、資料不足の壁にはばまれて、未詳の部分も多いのだが、慶長・元和期を経て、江戸時代中期に至るまで、能の家として代を重ねてきたものらしい。

ここに秘伝を伝えた氏春は、彼の久保倉への秘事相伝より七年前に刊行された『京羽二重』（宝永二年へ一七〇五版）に、観世織部（重記）・同三十郎（清親）・今春権兵衛・同庄五郎らの四座系役者や、田中素秋・武村孫之進・川勝助之進・堀池庄兵衛・嶋谷吉兵衛などの著名な京都衆と共に記載された「日吉弥右衛門」のことであろう。共に登載された顔ぶれからみて、彼は京都在住の能大夫としては、まず一流役者の部に数えられ、名前を知られた存在であつたらしいのである。

日吉座に限らず、大和猿楽四座以外のもろもろの猿楽座は、室町時代末期から江戸時代初期の社会的経済的変動の波を受け、解体を余儀なくされるにいたり、大和四座の中へ吸収併合されるか、或は、群小猿楽化して地方へ分散せざるを得ないような状況に直面した。そういうなかで、ともかく、江戸時代なかばまで、日吉が独立性を保持することができたのは、稀有なる幸運だった、ということができよう。

いまここで、日吉座の歴史を調査・検討するにあたって、まずこの弥右衛門流の動向を見ることから始め、そこから日吉座全体を見、さらに大和猿楽諸座との関連等を見ることにしたい。

一 狂言日吉弥右衛門（付・永禄年中日吉座史料）

〈日吉弥右衛門の存在〉

室町時代末期の能楽史料としても貴重な役割を果たしている『言継卿記』の、永禄七年（一五六四）八月十九日の条に、次のような記事が見えている。

葉室へ日吉弥右衛門狂言、明王又六朝喰に来、

これは、前日（十八日）の松尾御霊社の祭礼猿楽を観覧するため、洛外松尾の里にある妻女の実家葉室頼房邸へ来て一泊した言継が、翌十九日の朝食の際に、その相伴として召されていた狂言役者日吉弥右衛門および明王又六の兩人と、同席したことを記したものである。かつて、岳父葉室頼継（享禄二年（一五二九）没）がこの地に隠栖していたという縁もあったか、松尾御霊社の祭礼にはしばしの足を運び、祭礼猿楽を観覧する機会を持った言継は、このように、役者たちとも席を同じくすることもあったらしく、この時は、葉室にもう一泊した翌二十日にも、

松室中務大輔所に朝喰有之、予・葉室・社務三位・亭主父子等相伴了、次狂言日吉弥右衛門、笛吹同弥八来、入麴、次小漬等有之、申刻帰葉室

と記されており、日吉弥右衛門とは二日続けて同席したようである。十八日の祭礼猿楽に出仕した日吉弥右衛門を、祭礼の主催者松尾神社やゆかりの深い葉室家が招き、労をねぎらったものであろう。同席した言継と弥右衛門は、この時が初対面でもあったのだろうか、言継がその日記へ弥右衛門の名前を記したのは、八月十九日が最初であり、二度目に同席した翌二十日の記事が、弥右衛門の名前が書かれた最後になるのである。

二度の同席で、二人の間には面識が生じたに相違ないものと思われるし、言継の御霊社猿楽観覧のことは引き続き何度

かあったうえに、弥右衛門の参勤も途絶えた訳ではなかったと思われるにも拘らず、『言継卿記』が日吉弥右衛門の存在を伝えるのは前記八月十九・二十日の両日のみで、観世座系の諸役者や京都の手猿楽者たちに対する程の関心を、弥右衛門には持たなかったらしい。しかし、実は、室町時代における日吉弥右衛門に関する唯一の記録でもある右の二例によってのみ、日吉弥右衛門の存在と彼が狂言の役者であり、松尾御霊社の祭礼猿楽に参勤する一座の座衆の一人であることを知ることができるのである。

そこで、松尾御霊社への猿楽参勤史料を通覧し、その一座の性格等を大づかみに把握、弥右衛門を取りまく環境を調べることから始めることにしよう。

〈松尾御霊社祭礼猿楽〉

洛外松尾御霊社の祭礼猿楽に関する記録は意外に少なく、能勢朝次氏を始めとする先学諸氏の博搜にも拘らず、山科言継とその子息言経の日記に記されたものがすべてであるらしく、他にそれを伝える史料は、目下のところ、存在しないようである。

『言継卿記』によると、記者の言継が二十六歳にあたる、天文元年（一五三二）の観覧分が最初の記事で、以後、七十歳に達した天正四年（一五七六）の分まで、四十有余年の間に、つごう九回を記録している。観世座の大夫を始めとする役者衆とも交際があつて、自らも謡を嗜むなど、能にはかなりの関心を持っていた言継であつただけに、自分が見た九回の上演曲目のほとんどすべてを書き留めており、上演曲目の頻度・傾向を知るためには有効な資料を提供してくれることになった。一方、子息言経は、父と共に観覧する機会があつた天正四年に、僅かに一度記すのみである。祭礼猿楽は、天正末年までは続いていたと考えられるのに、言経の日記（『言経卿記』）に、ほとんど書かれていないのは、天正七年の父の死去を

機に、母方葉室家との関係も間遠になり、祭礼猿樂を見に出かける機会もなくなってしまったのであろう。或はまた、天正十三年六月には勅勘を被る身となった言経は、以後長らく、一家を挙げて堺・大阪方面に居を定めざるを得なくなった事情もあり、この点も影響していることは確かであろう。

言経・言経父子の記録は、能勢氏『能楽源流考』や、山路興造氏「丹波猿樂日吉大夫考」^{〔云能〕}_{53年10月}その他に、その大部分が掲載されているが、いま重複を惧れず、ここにも採録しておくことにする。

天文元年八月廿日 今日八時分申樂始、大夫日吉、難波梅・春栄仕候了、雨下候間、其間々置候了、 (A)

天文廿二年八月十八日 中御門令同道葉室へ罷向、……今日彼在所祭也、但猿樂日吉不来之間、猿樂無之、 (B1)

同 八月廿一日 今日可罷歸之处、種々申事相調、猿樂可有之間逗留云々、……及黄昏猿樂始了、五番有之、竹生島・

野宮・鞍馬天狗・たてを・猩々、五番有之、 (B2)

永祿二年八月十八日 ……葉室罷向、……神事之猿樂入夜三番有之、大夫日吉也、黒主・田村・東岸居士等也、雖為

五番雨降之間如此、 (C)

永祿七年八月十八日 ……葉室へ罷向、先飯有之、未下刻猿樂始了、伏見・熊野・金山寺・東岸居士・かつほ、五番有之、 (D1)

同 八月十九日 葉室へ日吉弥右衛門 狂言、明王又六 朝喰来、 (D2)

同 八月廿日 松室中務大輔所に朝喰有之、子・葉室・社務三位・亭主父子等相伴了、次狂言日吉弥右衛門・笛吹同

弥八来、入麵、次小漬等有之、申刻歸葉室、 (D3)

永祿八年八月十八日 午刻自京各来、……樂頭明王又六来、申刻猿樂始、大夫日吉孫四郎、高砂・八島・百萬・通小

町・合甫入破等也、 (E)

永祿十年八月十八日 朝食以後葉室へ罷向、……未下刻於御靈社猿樂有之、大夫日吉、如例年五番、氷室・率都婆小町・野宮・大会・合甫之入破等也、二番入夜了、
(F)

永祿十一年八月十八日 朝食以後葉室へ罷向、……神事猿樂見物、大夫日吉一右衛門、六番有之、鼓滝・頼政・率都婆小町・鼎・守久・猩々等也、
(G)

永祿十三年(元龜元年)八月十八日 葉室へ罷向、……於御靈猿樂、五番有之、各見物ニ罷向、大夫日吉、如例、伏見・篠原実盛・野宮・鼎・慈童等也、
(H)

天正四年八月十八日 朝食以後葉室へ罷向、今日彼在所之神事猿樂如例年在之云々、……未下刻猿樂有之、大夫日吉両三人有之、五番有之、伏見・道盛・舟弁慶・錦木・猩々等也、申下刻終了、……樂頭命王源左衛門来了、
(I)

以上が言継の日記から集めたものである。天正四年分は、言経の記事(『言経卿記』より)をも掲げておく。

天正四年八月十八日 御靈社之能見物ニ各令同道罷向了、日吉大夫也、伏見・通盛・舟弁慶・錦木・猩々等有之、
(I2)

右の九例を通覧してみると、松尾御靈社の祭礼猿樂と日吉弥右衛門とについて、いくつかの点を確認することができるようだ。

まず御靈社の祭礼猿樂は、日吉座の大夫が演能するならわしになっていた、ということ指摘できる。永祿七年(D1)の分にのみ上演大夫を欠いているけれども、他の八例すべてが日吉大夫の演能であることを伝えており、七年も、恐らく、例外ではなかっただろう。日吉大夫が一座を率いて参勤し、演能したのに相違ない。したがって、永祿七年の祭礼に出勤し、葉室家の朝食の相伴にあづかった狂言役者日吉弥右衛門も、同年八月二十日に彼と行を共にした笛吹き弥八(D3)も、当然のことながら、日吉大夫に率いられて参勤したものであり、日吉座の座衆の一人だということになる(その姓からみて、

早くに想像されることではあるが)。弥右衛門の参勤は、永禄七年に限ったことではないのは当然で、七年を含む数年、ないしはそれ以上にわたったのではないだろうか。

祭礼での上演曲数は、能は五番を原則としていたようである(B2・C・D1など)が、時には降雨などによる例外(G)もあった。狂言の上演については、当代の多くの記録がそうであるように、全く言及していないが、何番かは必ず上演された筈である。狂言役者弥右衛門の存在がそれを証しているといえよう。

祭礼猿楽の演能は日吉大夫にまかされていたものの、同祭礼猿楽の楽頭職を保持していたのは命王(明王)であった。永禄八年の祭礼(E)には明王又六の、また天正四年の祭礼(I)には命王源左衛門の名前があげられていて、それぞれが当時の祭礼猿楽の楽頭であることを明記されている。大永二年(一五二二)や享禄二年(一五三九)には、京洛の地で勧進能を興行した経験をもつ命王が(『二水記』・『後法成寺尚通公記』等)、かつてはこの祭礼の猿楽上演の権利をも保持していたものと思われるが、それはいつ頃からか日吉座の手に渡り、天文以降は、式三番の上演権のみを保有する翁大夫として、祭礼に参加していたのであろう(表章『大和猿楽の「長」の性格の変遷(下)』参照)。

ちなみに、同じ松尾神社の御田植祭(祭日は六月十四日)の楽頭でもあったらしい命王は、そこで丹波猿楽八田(矢田)大夫と同席している例もあって(『言継卿記』、天文二十三年六月十四日・永禄七年六月十四日の条など)、その点から丹波猿楽系の座と見られており(『能楽源流考』九九四ページ以下)、このことが、御霊社祭礼で、命王と同座する日吉座を丹波猿楽系と考える根拠の一つとなっているのである。

さて、もう一つ、松尾御霊社参勤の丹波日吉座が独立した演能集団として、十分に機能していることである。洛外の一神社の神事猿楽を担当するだけなら、さほど大規模な構成を必要としたとは思えないが、それでも大夫を中心として、諸役をカバーしなくてはならない筈であり、事実、日吉座はそれを維持しているのである。前記史料の範囲内に限っても、

かなり長期にわたって参勤していることが知られる。日吉大夫に統率された座衆の規模などは、現在推定すべき材料もないが、それでも前記A～Iを含む『言継卿記』によって、日吉座の座衆何人かを把握することができるので、以下に列挙しておく。(もとより姓氏など持たなかった猿楽衆は、自分の所属する座の名称をそのまま姓に用いることが多いようである。)

大夫(シテ役者)として挙げられているのは日吉孫四郎(E)と日吉一右衛門(G)の二人。いずれも日吉座を代表する役者であろうと推定されるが、この両者の名前は、E・G以外の部分には全く所見がなく、記録のうえでは孤立しており、兩人相互の関係や活動の状況を把握することはできない。囃子の役者としては、先に弥右衛門と共に松室中務大輔に招かれた笛吹弥八(D3)の存在を知ることができるが、この人もまた、孫四郎、一右衛門の両大夫同様に、資料的に孤立した存在で、詳細を知ることができない。天文十三年四月十六日の条に、

早々藤中納言罷向、……日吉弥十郎来、中酒之内音曲候了……

と記されている日吉弥十郎も、日吉姓であることといい、「中酒之内音曲候了」ことといい、能役者でしかも丹波日吉座の一員ではないかと思われるが、これも確証はない。また、永禄七年六月十四日の条にその名が見える日吉十郎四郎は、御田植神事の猿楽に出勤したのであり、能役者であることは確実だが(多分、囃子方であろう)、御田植神事の能は八田(矢田)大夫が勤めることになっており、彼は日吉姓ではあるが八田大夫と行を共にしていたのかも知れない。この人も、他に全く所見がない。

以上、ほとんど既知のことを書き連ね、しかも隔靴搔痒の感があるが、これが弥右衛門の属する日吉座に関する知識のすべてである。松尾祭礼への参勤史料として挙げたA～I2(実質的にはC～H)が、実は、永禄年中に見られる丹波日吉関係史料の全てにも等しいのである。以下には弥右衛門空庵父子を中心に、いくらかの史料を紹介しながら考察の手がかりとしてゆきたい。

△『役者目録』の日吉弥右衛門△

先に見る通り、松尾御霊社参勤の日吉座の座衆のほとんどが、他に同時代史料がなく、史料的には全く孤立した存在となってしまうのに対し、日吉弥右衛門については、周知のごとく、江戸時代初期になって、観世座小鼓方観世勝右衛門元信によって編纂著述された『近代四座役者目録』（以下『役者目録』と略称）の「近代観世方狂言師之事」に一項を設けられ、その事績の一部が記されるという幸運に恵まれるのである。『役者目録』の該当記事には次のようにある。

日吉^{ヒヨシ}弥右衛門 宗節・宗金代ニスル、日吉空庵が親也。サキニクワシ。

観世勝右衛門が、日吉座の弥右衛門を「近代観世方狂言師」の一人に数えているのは、一見、意外なようにも思えるが、編者にとって、弥右衛門に関する知識のすべては、父親又次郎重次をはじめとする観世座の先輩たちからの伝聞であって、自ら座内の経験やできごとに限定されることになり、結果として、弥右衛門を観世座衆の一人と数えることになったのではなからうか。弥右衛門が観世座衆であったという、明確な史料があったとは思えない。

勝右衛門のいう「近代」は、永禄年中（一五五八～六九）から始まることは明らかで、先の『言継卿記』の日吉弥右衛門との間に矛盾は生じない。また、弥右衛門を、観世大夫宗節（元忠、天正十一年没）・同宗金（元盛、同五年没）父子と同時代に活動した役者だというから、大よそ天正年中の初年くらいまでは活動したものと考えられ、永禄年中はその全盛期に近い年頃といって良からうか。「サキニクワシ」とあるのは、同じ観世座の連師手の部の日吉空庵の項でも、弥右衛門にふれていることをさすのであり、そこには次のように書かれている。

日吉^{ヒヨシ}空庵 黒雪連ヲスル、丹波ニ住ス、〈中略〉ヲヤハ弥右衛門ト云テ、狂言ヲスル、小二郎元頼ナド、イロ／＼セリフ云タル^{イッ}変アリ、セウザン公方^{ママ}ヲ、信長へ御成ヲナシ、能アリ、其時、二番目八嶋也、御酒ノ中ニ、進物共上ル、

八嶋ノ時、胴甲上ル、元頼ヤガテ、アイニ那須ノ与一が扇ヲイタル處ヲ所望、其儘、弥右衛門カタル、又、融^{トラル}ノアイニモ、イロ／＼六ヶ鋪、元頼セリフ云カクルヲ、ヨキニ返答シタルト也、(下略)

この記事を読んで、最初に気付くことは、丹波日吉座に属していた弥右衛門であるのに、肝心の日吉座で彼の活動については全く記されていないことであり、逆に観世座に参加した時の様子は、具体的にかなり詳しく書かれている、ということである。先に、「宗節・宗金代ニスル」と書かれていたのだが、これが単に、彼の活動した期間を限定するためだけのものではなく、実際に、観世大夫らと同座して演能活動したことを示すものであったことも分る。事実、「八嶋」のアイの話は、永禄十一年十月、上洛した織田信長が、細川藤孝(幽斎)の邸へ、將軍足利義昭(昌山)を招いて、能を興行した時のことであろう。日付には異説もあるが、『永禄記』(群書類従所収)によると、同月二十二日のことであったという。

大夫は観世左近大夫元盛(宗金)が一手に勤め、ワキの観世小次郎元頼以下、囃子の観世彦右衛門・同又兵衛ら観世座の有力者のほとんどが参勤、高砂・八嶋・定家・道成寺・呉服の五番を上演している。初め、全十三番の上演を予定したのであったが、まだ戦火も収まらない時であるから、という信長の意見によって、五番の上演に落ち着いたのだとか、小鼓を打つように求められた信長(小鼓の名手だったという)は、かたく辞退してついに打たなかった、などの逸話の伝えられる興行で、『信長公記』や『総見記』にも詳しい。一方、「融」は上演頻度も高く、日時を特定することはむづかしいが、小次郎元頼が関与しているから、その没年天正二年よりは前のことで、或は、永禄十三年(元亀元年)四月一日(これも日付に異説あり)、二条城の完成と將軍の移徙とを祝賀して行なわれた興行の時のことであったか知れない。將軍移徙の能とはいっても、実際に指揮裁量したのは織田信長であった。この時は、観世・金春両大夫(ワキ小次郎元頼も出演している)の立合能で、脇能玉の井以下全部で七番を上演、七番目が観世大夫の演ずる融であった。

右の「八嶋」や「融」のような、弥右衛門の挿話を讀むと、彼は狂言の役者といっても、独立した狂言(いわゆる本狂

言)を演ずるよりは、どちらかといえば、アイ狂言を勤める時に、その本領を発揮したのではなかったかと思わせ、そのアイの芸は、観世座の中でもかなり高く評価されていたことをうかがわせるといえよう。もとより編者の伝聞による記述ではあるが、弥右衛門の芸風の一端を示しているようである。

初めにも記したように、元信が、弥右衛門の日吉座における具体的事績には、全く言及していないのは、彼が言及すべき材料を何も持たなかったからであり、実は、弥右衛門が松尾御霊社へ参勤した事実すらも知らなかったのではないだろうか。

〈狂言・日吉弥三郎〉

永禄年中、日吉弥三郎という狂言の役者がいた。といっても、特に著名な役者でもなく、二つの演能記録にその名前が見えるだけなのだが、実は、狂言日吉弥右衛門との関連で無視し得ない人物である。

永禄七年(一五六四)五月十四日から晴天四日間(14・15・17・20日)、観世大夫元忠(宗節)と養子三郎元盛(宗金)父子は、相国寺石橋八幡で勧進能を興行した。石橋の勧進能(宗節にとっては二度目)としてよく知られたものである。二日目と三日目とを見ただけでなく、四日分の上演曲目全部を書き留めた言継によれば、この勧進能は「奉公衆馳走」(『言継卿記』、五月十五日の条)、すなわち、將軍の側近にある奉公衆の肝煎りによる、いわば足利將軍後援の勧進能だったわけで、第一日目に將軍義輝自身がこれに臨んだのは当然として、諸大名衆をはじめ、棧敷を求めた近衛・久我など公卿貴族も連日観覧し、洛中の老若男女も群集するという盛行ぶりであったという。

この勧進能の出演者の詳細は、承応三年(一六五四)六月十九日付の観世庄右衛門元信の奥書を持つ「永禄六年(実は七年)相国寺八幡観世大夫勧進能記録」によって知ることができる。本記録は、法政大学能楽研究所観世新九郎家文庫蔵の

江戸中期筆『能楽古記録集』(一冊)に収められた六種の能楽史料の中の一つで、田中允氏が『校本四座役者目録』(わんや書店刊)に「優伎録」の一部を翻印紹介された際「石橋勧進之記異本」と名付けられた番組と同系統のものである。翻印本よりは、本記録の方が誤写も比較的少く、やや良質の本文を持っている。もっとも、編者元信の依った、現在は存否不明の「矢島ゼウラン」本そのものに、編者をして不審をいだかせるような錯誤(例えば、大永年中死去の笛吹松垣本彦兵衛の名があったりする)があったり、なぜか笛吹きの名前の多くを脱しているなど、扱いに慎重を要することはいうまでもない。

さて、この記録で石橋の勧進能を見ると、観世大夫父子と共に出演した役者には、福王(ワキ)・弥石(ワキ)・観世彦右衛門(小鼓)・高安与兵衛(大鼓)・似我与左衛門(太鼓)など、観世座の有力役者としてなじみの深い者もあれば、幸五郎次郎(小鼓)・大蔵仁介(大鼓)など金春座の者、金剛与次(ワキ)・宝生新左衛門(ワキ)・幸次郎左衛門(小鼓)。元信は四郎次郎の事かと云う)、サカフト(太鼓)などこの勧進能番組にしか所見のない者もあって、当時の役者を知るうえでも有効な資料であることに気付くが、それらの人々にまじって、日吉弥三郎の名前がある。

第一日目の式三番で、大夫元忠が翁を、幸源右衛門甥がスマイ(千歳)を勤めたのに対し、サンバサ(三番三)を日吉弥三郎が勤め、三日目には、同じ顔ぶれで再びサンバサを勤め(弥三とある)、ほかに山姥のアイ(在処ノ者)と春永のアイ(弥三とある)とを勤めている。二日目の式三番は残念ながら欠落し、四日目のそれは別人が勤めている。「弥三」が日吉弥三郎をさすことは、幸源右衛門甥を「源甥」と記していることから判断できる。

弥三郎が、三番三とアイだけに出演するように見えるのは、この記録が初日のガンカリガネ以下四日間十八番あったはずの狂言の出演者名をすべて欠くという不備のせいもあって、いわゆる本狂言には出演しない役者だったという訳ではなさそうである。

この人物の名前は、石橋勧進能の三年前、永禄四年(一五六一)にも所見がある。

將軍義輝が三好筑前守義興邸へ出かけた時興行された能に、日吉弥三郎が参加しているのである。この時は、同年三月晦日と後三月二日の両日興行されたが、その第一日目には、舞台近くの庭上へ、近江猿楽の日吉大夫と嵐とが、田楽衆三人と共に「御鞠御能歎^{ホム}申役人」として祇候していたことでも有名な興行であった。

一日目は脇能老松以下全十四番（続群書類従所収『永禄四年三好亭御成記』では「三輪」一番を脱落する）、二日目は難波以下全十番が上演され、観世大夫（宗節）が一人で舞い通した。二日で二十四番を舞うなどということは、今日では想像もできないが、当時は大夫が通して舞うことの方が普通であって、特に珍らしいことでもなかったことはいうまでもあるまい。さて、弥三郎についてみると、この両日は式三番への出演のみを確認できる。該当する部分を左に掲げておくことにしよう。

（一日目）式三番

小鼓頭ヲ取観世彦右衛門

脇鼓 日吉仁兵衛

（翁 観世大夫）

同 明王又兵衛

大鼓 高安与兵衛

（笛 嵐 ）

千歳踏 日吉弥三郎

（サンバサ） 幸源右衛門

（二日目）式三番立

小鼓頭取 明王又兵衛

ワキ鼓 日吉仁兵衛

（翁 観世大夫）

同 不知名

大鼓 大蔵仁助

（笛 高安〔孫大夫〕）

センサイフ 幸彦左衛門

サンバサ 日吉弥三郎

式三番の囃子に加わった観世彦右衛門・高安与兵衛・大蔵仁助等は先の石橋の勧進能にも出演しているし、千歳の日吉弥三郎に対し、サンバサの幸源右衛門は宇治源右衛門ともいわれた宇治猿楽幸座出身の狂言役者で、良く知られている。二日目の千歳の幸彦左衛門は消息が知れないが、源右衛門らと同系の役者であろう。明王又兵衛は、『言継卿記』の明王らと同系たることは疑いないが、明王姓ではこの人だけが『役者目録』に所見があり、観世座との交流が深かったことを思わせる。

石橋の勧進能の式三番と比して、目につくことは日吉弥三郎が、先には両度ともサンバサを勤めていたのに対し、今回は、第一日目には千歳を、第二日目にはサンバサを勤めていることである。

千歳はシテ方の役者が、三番三は狂言方の役者がそれぞれ勤めることを通則とする現行観世流（上掛り）の方式と、千歳も三番三も共に狂言方の役者が勤めることになっている現行下掛り方式とが、截然と分かれている現在の目からみると、観世大夫の興行上演でありながら、狂言役者日吉弥三郎が千歳を勤める第一目の式三番は、奇異に感じられるかも知れない。しかし、元来、四座の式三番では、三番三はもちろん千歳も狂言方の役者が担当する形（現行下掛りの方式）が原則であったと認められるので（表章『大和猿楽の「長」の性格の変遷（下）』参照）、この三好亭でのそれが異風だったという訳ではないのである。事実、先の石橋の勧進能でも、一日目の千歳を勤めた幸源右衛門甥は、二日目には安宅の強力を勤めて、彼も日吉弥三郎同様に狂言役者（伯父源右衛門も狂言である）であったことは明らかである。四日目の大夫元忠の翁、今春弥右衛門のサンバサに対し、千歳を担当した次郎兵衛も、弥三郎・源右衛門甥にかんがみ、狂言方の役者であったに相違ないのである。

このようなケースは、観世座でも、意外に後年に至るまで引きつがれており、例えば、慶長六年（一六〇一）三月十二日、豊臣秀頼の徳川家康振舞の能で（於大坂）、観世大夫の翁に対し、長命（驚）伊右衛門と大蔵弥太郎とが、それぞれ三番三と

千歳を勤めて相手をしたこともあるし（観世宗家蔵『文禄慶長年間御能組』（仮称））、慶長十二年正月九日の江戸城移徙の能（増築完成祝賀。市民の観能を許可。町入能の最初の例）の第三日でも、観世大夫の翁に、長命伊右衛門と春藤仁介とが、それぞれ三番三と千歳でつきあったことがあり（宮城県立図書館伊達文庫蔵『古之御能組』）、同様の例は、寛永年中後半にいたってもまだ見られるのである。かくの如く、観世座の式三番が、常に現行観世流方式であった訳ではないことを示しており、調査し得た範囲では、下掛り諸流の場合は例外なく原則通り（三番三・千歳共に狂言方）に行なっているのに対し、観世の場合は現行観世流方式の方がやや多く数えられ、原則通りの方が少ない。それでも、先の二例のように、晴の舞台とも思える時にも、原則通りで上演することもあって、どちらの方式で上演するかは、任意であつたらしく、比較的自由な裁量にまかされていたようである。

ところで、『三好亭御成記』の能組の部分のみを写した文書一通が、観世新九郎家文庫に所蔵されている。「コレハサル所ニ有ヲ写 観世休斎宗与」（休斎宗与は元信の入道名）と識語があつて、首部には「明暦二丙申迄九十六年ニ成」と、永禄四年から書写した明暦二年（一六五六）迄の年数が書いてある。番組は続群書類従所収本に比し、第一日目の狂言餅酒・楽阿弥を脱落する点が最も大きな異同で、以下小異はあるけれども、両書は相互に誤りを訂しうるものである。さて、この宗与、与、写しの番組は、第一日目の千歳を勤めた日吉弥三郎に、次のような注を付けている。

千歳父 日吉弥三郎 空庵親也
後弥右衛門

この注記は重要である。右記によれば、三好亭の能に出勤した狂言日吉弥三郎は後の弥右衛門で、観世座ツレの日吉空庵の親だ、というのである。弥右衛門を空庵の親とする説は、同じ元信の『役者目録』でも主張されていたことであるが、弥三郎と弥右衛門が同一人物の前名と後の名前だとする説はここにのみ見られる。弥三郎と弥右衛門とを結びつける重要

な接点であるだけに、注記の信頼性が問はれることになるだろう。弥三郎が後に弥右衛門と称したという説を認めても、現段階では少も矛盾は生じない、という程度のことしか吟味の材料を持たないが、この元信の注記は受け入れても大過ないものと思われる。『役者目録』を始めとする元信関係文書に見られる、彼の篤実にして学問的な態度から判断して、この注記も何らかの依るべき史料があつて付されたものと思われ、これが元信の単なる思いつきからなされたということではないだろう。弥三郎という、年令の若さを思わせる呼称は、彼が弥右衛門を名乗る以前のものであつたに相違なく、永禄七年五月の石橋勸進能と十月の松尾御霊社祭礼猿楽との間に改名のことがあつたらしい。いよいよ年令的にも充実した世代に達したのであろうか。むろん、こうしたことは、記者により旧名で記すことがあつたりすることもあつて、改名の時期を限定することはむづかしいが。

右は、日吉弥右衛門の動向を知るための一・二の史料を加えたことになるが、それでも直接に関連する史料は永禄四年と同七年との、僅か数回に過ぎず、『役者目録』からの推定分を含めても十回に満たない状態である。それでも、日吉弥三郎と日吉弥右衛門が、同一人物であることを示せたのは大きい。後にまとめて考察する予定の、日吉座と観世座等の関係を知るうえで有効な資料となるからである。次に、弥右衛門(弥三郎)の名前が直接見える史料の、要点のみを一覧しておくことにする。

。永禄四年(一五六一)三月晦日

將軍、三好亭御成の能(観世大夫演)。日吉弥三郎、千歳フミを勤む(翁、観世大夫)。〈三好亭御成記〉

・同 後三月二日

同 右、日吉弥三郎、サンバサを勤む(翁、観世大夫)。〈同前〉

(両日、ツレ日吉五郎二郎・小鼓日吉仁兵衛、同座し出演する)

。永禄七年（一五六四）五月十四日

相国寺八幡石橋の勸進能（観世大夫父子演）第一日目。日吉弥三郎、サンバサを勤む（翁、観世大夫）。

〈新九郎家文庫、勸進能記録〉

・同 五月

同 右（三日目）。日吉弥三郎、サンバサ（翁、観世大夫）・春永アイ・山姥アイ（在処ノ者）を勤む。〈同前〉

・同 八月十九日

日吉弥右衛門、明王又六と共に葉室家朝食に相伴。山科言継等と同席する。〈言継卿記〉

・同 八月二十日

日吉弥右衛門、笛吹き日吉弥八と共に中務大輔所にて会食。この日も言継と同席する。〈同前〉

。永禄十一年（一五六八）十月二十二日^(?)

京細川亭、織田信長興行能（観世大夫演）。日吉弥右衛門、八嶋のアイに那須を語る。〈役者目録〉

。永禄十三年（元亀元年・一五七〇）四月一日

京將軍家移徙の能（観世大夫演）。日吉弥右衛門、融のアイを勤めるか。〈同前〉

前掲のごとく、数少ない資料が存在するだけではあるが、それでも周辺の史料を考慮に入れ、これらをつき合わせてみると、狂言日吉弥右衛門のことがいくらかは具体的になってうかび上ってくるようである。いまとりあえず整理してみることにしよう。

① 狂言日吉弥右衛門は、初め弥三郎といい、記録上、永禄七年頃から弥右衛門に改めたようである。

② その姓からも想像されるように、丹波日吉座の座衆で、日吉大夫のもとにあって、松尾御霊社祭礼猿楽に参勤した。参勤頻度等は全く分らない。

③ 一方、観世大夫元忠・元盛父子時代の観世座へも、語らわれて参加・出演することがあり、勧進能や武家主催興行のごとき大がかりな、晴の舞台に立つこともあった。

④ 観世座の興行に参加した場合は、三番三・千歳、或はアイ等を勤めているが、ワキと問答するアイにおいて、その本領を発揮するようで、高く評価されたらしい。

⑤ 現存資料によれば、弥右衛門は永禄年中を中心とする期間が全盛だったと思われる。天正初年頃までは舞台に立っていたらしいことも推測される。

二 ツレ大夫日吉弥右衛門

〈ワキ・日吉弥三郎〉

日吉弥右衛門の前名と考えられる「日吉弥三郎」という名前が再び登場してくるのは、石橋の勧進能があった永禄七年から三十年余を経た慶長初年のことである。

慶長元年（文禄五年、一五九六）から同四年までの四年間に毎年一回ないしは二回（三年のみ）、つごう五回だけその名前を見出せるのだが、注意すべきは日吉弥三郎が観世大夫のワキを勤め、福王神右衛門父子と肩を並べていることである（また、目下のところその名前が南都興福寺の神事猿楽関係史料にのみ見えるということも注意したいが）。弥三郎の名前の書かれた五例の記事を全部掲げることにするが、興福寺薪猿楽に出勤したもの三例（『薪能番組』、三一書房『日本庶民文化史料集成 第三巻』所収）、十一月の春日若宮祭松之下の猿楽に出勤したもの二例（『春日若宮祭礼後日能（番組）』、奈良県立図書館郷土資料室、表章先生ペン写本による）である。

『薪能番組』所載分

文禄五年（慶長元年）丙申二月（J）

九日（第三目） 今春ハ春日へ

難波 観世大夫 ひよし弥三郎

八嶋 宝生大夫 ワキ虎八郎

遊屋 金号大夫 ワキ 高安

慶長参年戊戌 於南大門薪能（K1）

第四日 九日

唐船 今春若大夫 ワキ 左近

あつもり 宝生若大夫 ワキ トラ八郎

夕 貞 観世若大夫 わき 福王

黒塚 今春若大夫 ワキ しゆんと

常陸帯 宝生若大夫 ワキ トラ八郎

かつらき 観世大大夫 ワキ ひよし弥三郎

以上六番

狂言はらたてすのしやうちき房

第七日 十二日 （K2）

白髪（髭） 宝生大夫 ワキ トラ八郎

あま 今春若大夫 ワキ しゆんと

道明寺 金号大夫 ワキ 伊右エ門入道

遊行柳 観世大夫 ワキ 福王

桜川 宝生大夫 ワキ トラ八郎

舍利 今春若大夫 ワキ 左近

殺生石 金号七つ大夫 ワキ 五左衛門

志賀 観世方梅若大夫 ワキ ひよし弥三郎

以上八番

ゑほし折のきやうけん 甚六 弥太郎 鷺大夫
両三人也。

『春日若宮祭礼後日能（番組）』所載分

慶長二丁酉年十一月廿八日 （L）

祭礼後日御旅所ニテ

高砂 金号七ツ大夫 わき 高安

遊屋 観世大夫 ワキ 福王子息

とくさ 宝生大夫 ワキとちへら

山 婆 今春若大夫 ワキしゆんと

源氏供養金号大大夫 ワキ 高安

當 麻 観世大夫 ワキひよし弥三郎

老 松キリ 宝生大夫 ワキとちへら

以上 合七番目

狂言一番 甚六 弥太郎 さき大夫 両三人にて

永祿年中の日吉弥三郎が狂言の役者として活動していたのに、ここではワキとして参勤し、観世大夫（又はその名代）の相手をしているのは意外で、史料に対する疑義を感じないではないが、J・Mを一覧しても分るように、ワキとして日吉弥三郎と同列に並べられた人々、すなわち、観世大夫に配する福王（神右衛門）・福王子息（神介）、金春大夫のしゆんど（春藤六右衛門）、金号父子の高安（太郎左衛門）等、宝生のとちへらを別にすれば、いずれもそれぞれの座のワキ役者であることに疑いはなく、また、ワキ日吉弥三郎の存在を伝える前掲両史料には、福王を満王としたり、とちへら（栃原）をといへら・虎八郎とするような、誤写・誤読を含んでいるが、基本的には信頼性の高い史料であることからみて、日吉

慶長四亥 祭礼 後日 （M）

加 茂 宝生若大夫 ワキとちへら

景 清 観世大夫 ワキ 福王子

江 口 金号大大夫 ワキ 高安

三井寺 今春者大夫 ワキしゆんと子

井 筒 宝生大夫 ワキとちへら

かつらき 観世大夫 ワキひよし弥三郎

以上六番也

弥三郎が観世大夫のワキを勤めていることを、事実と信じて良いようである。

右のJ・Mを見る限りでは、観世座ワキ役者としての日吉弥三郎の存在はそれほど大きなものではなかったようで、彼が大夫の相手として登場するものはキリ能が三番(KI2・M)と目につき、その年令は全く不明ながら、いわば初心者扱いを受けているかのようである(當麻(L)一番を除けば特記すべきものは皆無といって良からう)。また、『薪能番組』により上演頻度を調べても、同様のことがいえる。例えば、慶長元年から四年までの、観世大夫(およびその名代)の上演で、ワキ役者の名前が明記されているのは全三十三番、そのうち、日吉弥三郎は三回(J・KI2)を占めるが、福王神右衛門と神介父子の二十七回(父が二十一回、子が六回)には違及ばないのである。福王父子は、さすがに観世座の本脇の貫禄を十分に見せているといえよう。むろん、進藤久右衛門・権右衛門兄弟の観世座への参加はまだしばらくはない。この数字と所演曲とを見るだけでも、日吉が、ワキとして確かな位置を占めていたとは言えないだろう。なお、残りの三回は、一回を観世又九郎(了叱小次郎元頼の子、後に協方を離れた)が、二回を山科弥次(後の弥右衛門であろう)がそれぞれ勤めているが、当時は日吉と同様の存在でしかなかったようである。

日吉弥三郎が、ワキとして活動しはじめた時期を定めるのはむづかしい。ワキ弥三郎の存在を初めて伝える(J)『薪能番組』も、文禄四年以前の記録は不備で、あっても大夫の名前と曲名を記載するだけだからである。尤も、文禄年中から慶長初年にかけては能の上演頻度は高いにもかかわらず、下間少進の『能之留帳』のような、やや特殊な史料の他は、能の足跡を知る手がかりを提供する記録類はごく少なく、『薪能番組』だけが責を負うものではないのだが。

一方、ワキとしての活動を終了するのは、ワキ弥三郎の最後の例となっている慶長四年(M)から、それほど時を隔てることはないと思う。慶長五・六年、遅くとも七年にはワキではなくなっている筈である。後にもふれるように、彼は名前を改めて、観世座のツレ大夫の一人として活動し始めているからである。

ちなみに、名前は弥三郎のままであるが、彼が千歳を勤めた例を、早く慶長四年に見ることができる。同年十月朔日から四日間、京都聚楽第の跡地で行なわれた、観世大夫身受とその子初千世（後の三十郎直述）の勧進能は徳川家康の積極的な応援もあって、実に盛大な興行になったようであるが、好天に恵まれた第二日目、大夫身受の翁、鷺伊右衛門（後の仁右衛門）の三番三に対して、第三日目も大夫の翁、日吉座ノ者の三番三に対して、それぞれ弥三郎が千歳を勤めたのである（観世宗家蔵、『天正以後御能組』）。かつての弥三郎がそうであったように、狂言役者として千歳を勤めているのかとも想像したが、第一日目の千歳を勤めた逆水彦三郎（『天正以後御能組』は日吉座ノ者と云）が、高砂（大夫演）のツレをも勤めており、この時は現行観世の方式に従ったらしく、弥三郎も、恐らく、ツレ役としての千歳を分担したものであろう。Mよりもほぼ二ヶ月前のことであり、弥三郎の転進を伝える最初の例といえるのである。

ところで、先に弥三郎が名前を変えて活動するようになると書いた。弥三郎の改名といえば、かつて永禄年中の弥三郎が弥右衛門と改めて活動したように、ここでも弥右衛門と改めることが当然予想されるのであり、事実、弥三郎の名前が見えなくなると同時に弥右衛門と思われる日吉が観世座のツレシテとして、目につくようになる。ワキ役者からツレシテ役者への転向の問題など、種々の問題点はあるが、ここではワキ役者日吉弥三郎の存在を確認するにとどめ、次項であわせて考察することにした。

〈日吉空庵〉

徳川家康が江戸に幕府を開いた慶長八年（一六〇三）前後から、観世座のツレ大夫の一人として日吉の活動が目につくようになる。われわれが知り得た観世ツレ日吉の最初の例は、先にも見たように、四年十月の観世大夫身受の聚楽第跡勧進能であるが、本格的に活動を始めるのは開幕前後からのことらしい。五・六年の頃にも、かなり大がかりな能の興行は数

こそ少ないがあつたし、それを記録する番組類をいま見ることも可能ではあるが、残念なことに、ツレシテ等にまで関心を示しているものは殆どなく、日吉に限らずツレ役者の活動を把握するのはむづかしいのである。

観世ツレの日吉は、史料によっては、日吉弥右衛門と記されていたり、単に日吉とのみ書かれていたり、稀には日吉大夫とも呼ばれていたりもするが、これらはいずれも同一の人物をさすことは疑いなしと思われる。そして、これが『役者目録』に登録されていて、狂言日吉弥右衛門の子で観世大夫黒雪(身愛)時代にツレをしたとされている日吉空庵その人に比定されることも、また間違いはあるまい。例によって、『役者目録』の「近代観世方連師手之夏」に書かれた記事を見ることがから始めたい。なお、〈中略〉部分は、父弥右衛門に関する記事で、すでにその項に引用してある。

日吉空庵

黒雪連ヲスル

子ノ空庵モ初ニハキャウゲンヲスル、京ニテ、サイ／＼勸進能ヲスル、声ハカタメナヨキ声也、能ハ下手也、八十バカリニテ果ル、

右の記事を見ると、空庵は丹波に住居を構えていたようだが、これは彼が丹波出身の役者であつたことを示すものと受け取られ、「日吉」姓であることを考慮して、空庵を丹波日吉の流れを汲む役者であろうとし、このことが空庵の父弥右衛門や、弥右衛門が所属した松尾御霊社参勤の日吉座を、丹波猿楽系の役者であり、かつ座であるとする根拠の一つになっているのである(『能楽源流考』九九〇ページ以下など参照)。

それはともかく、黒雪のツレをする空庵も、初めは父と同様に狂言を演じたとの事で、芸界へのスタートが、父親と同じ狂言というのは当然のことと思われるが、その証拠となるものは見付け得なかった。

さて、空庵という呼称であるが、これは『役者目録』以外の史料では確認できず、史料的には全く孤立した称で、隠居後の名前である可能性が多分にあり、観世座のツレとして活動した時代は別の名前を称していたに相違ない。現役時代の

空庵がどのように呼ばれていたかといえば、これも多分、父と同じく弥右衛門であっただろう。そして同時に、父弥右衛門の前名が弥三郎であったように、彼もまた前名を弥三郎と称したものと思われるのである。

前項では紹介しなかったが、天正八年(一五八〇)十月十九日(松尾御霊社祭礼の翌日だが)に、日吉大夫と同道して二條(誠仁親王)御所を訪れた日吉弥三郎(『兼見卿記』、同日の条)が、若き日の空庵ではなかったかと思われる。慶長年中に入っ
ての数年の間は、観世座のワキ(弥三郎)として名をとどめているが、同三年十月にはすでに弥右衛門と改めていたふしもあり(『北野社家日記』、十月十九日の条参照)、当時は弥三郎とも弥右衛門とも呼ばれていたらしい。改名と相前後してワキからツレのシテに転ずることになったものであろうか。(彼が黒雪のツレ役を勤めたのは、慶長四年以降十五年前半(黒雪の高野への出奔)にいたるまでのほぼ十年間だったことになる。)

空庵は八十歳ばかりで亡くなったという。最後まで現役の役者として活躍したのか否か、或は亡くなったのがいつのことなのかは、『役者目録』からは分らないが、この点に関連して、注意すべきことが二点ある。その一つは、法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵の卷子謡本の一本に、「右集謡自筆自章 寛永十五菊月日 日吉弥右衛門尉将氏(花押) 小嶋木工助殿参」との奥書を持つものがあって、この謡本の筆者日吉弥右衛門将氏(松雪斎ともいわれたようだ)を日吉空庵に比定する考えのあることである。空庵の全盛期を仮に慶長十年前後とするならば、右謡本の奥書を記した寛永十五年(一六三八)はそれからすでに三十年余を経ており、弥三郎として初めて登場したと思われる天正八年からは五十八・九年を経たことになり、かなりの老令ではあるうが、弥右衛門将氏を空庵に比定する考えを否定するものではない。

もう一つは、後にも見るようになるうが、慶長九年三月二十七・八両日、女院御所で盛大な能の興行があって、弥右衛門も観世大夫に従って出勤したが、そのことを伝える『雲上散楽会宴』(観世宗家蔵)や、それと全く同系の『古番組写』(葛野春雄氏蔵、東大史料編纂所の写本による)は、その出演者の多くに、当時の年令を書き付けていて、日吉弥右衛門(正得

とする)を45歳としているのである。もとより、『雲上散楽会宴』は後世の編纂本(観世元章の編纂か)でもあり、全面的な信を置くわけにはゆかないが、何らかの資料によったことは疑いなく、一往のメドとしてみることはできるだろう。弥右衛門が慶長九年(一六〇四)に45歳であったとすれば、前記謡本を筆写した寛永十五年には79歳となって、『役者目録』でいう享年に近くなり、その生涯の最晩年にあたることになる。逆算すると、彼は永禄三年(一五六〇)生となり、天正八年には21歳、いよいよ一人前の活動をするようになる年頃だったといつて良い。観世大夫と行を共にするようになった慶長初年から十五年頃までは、三十代後半から五十歳前後までにあたり、働き盛りであったことになる。(空庵の将氏説もその年令の説も、特に矛盾はないが確証もなく、今後期すべきであることはいうまでもない。)

それでは、観世大夫身愛のツレのシテ時代の日吉弥右衛門(空庵)の具体的な活動は、どのようなものであったのだろうか。具体的活動といえば、当然、その上演活動を見るわけであるが、先にも記したように、ツレ役者の名前が能組控等に書き残される機会が少なかったせいもあって、その活動の全般を把握するのは困難であるが、それでも、現存の各種能組集や記録類を調べてみると、慶長八年前後からは、日吉の名前が目につくようになり、その活動の大よそを知ることができそうである。慶長年間の日吉の出演記録で、管見に入っただけを、次に掲げ、参考に供することにしよう。能組集から抜萃する分については、日吉が千歳を勤める場合は翁・三番三の役者も掲げることにし、ツレとして出演した場合はその「曲名」と(演者名)とを記すにとどめてある。

①慶長四年十月朔日より。観世大夫身愛勸進能。於京聚楽第跡。(『^{天正}以後御能組』)

(一日目) 翁 観世大夫 千歳 日吉座ノ者 三番三十郎四郎

(二日目) 翁 観世大夫 千歳 弥三郎 三番三伊右衛門

(三日目) 翁 観世大夫 千歳 弥三郎 三番三日吉座ノ者

②慶長七年四月十九日。豊国神社祭礼能。(『舜旧記』)

豊国例年之能、……幽斎見物、能次長、辰刻ニ始ル、老松観世大夫子 兼平 宝生大夫子 軒端梅 観世子 遊屋 宝生大夫 是界 宝生子 猩々 観世座喜七子 観世大夫依煩式三番已下日吉大夫為名代勤之、

③慶長八年四月四日。徳川家康、將軍宣下祝賀能。於京二條城。(『將軍宣下御能組』)

(一日目) 翁 観世大夫身愛 千歳 日吉 三番三 鷺伊右衛門正次。
三拾八歳 四十四歳

④慶長九年三月廿七・廿八日。女院御所御能。(『雲上散楽会宴』)

(一日目) 翁 観世大夫身愛 千歳 日吉 弥右衛門正得 三番叟 日吉又右衛門等達
三拾九歳 四拾五歳 四拾七歳

衛門出演(いづれも観世大夫演)。

(二日目) 「白鬚」にツレ日吉弥右衛門出演(同前)。

⑤慶長十年五月三日。徳川秀忠、將軍宣下祝賀能、於山城伏見城西丸。(『將軍宣下御能組』)

(一日目) 翁 観世大夫身愛 千歳 日吉 三番叟 鷺伊右衛門

⑥慶長十年七月七日。大御所家康・將軍秀忠興行。於山城伏見西丸。

(一日目) 翁 観世大夫 千歳 日吉 三番三 鷺仁右衛門

(二日目) (日吉・梅若・初大夫、三人ニ被仰付、御能仕候)

⑦慶長十一年二月十四日。春日薪之能。(『古之御能組』)

翁 同断(年預役の意) 白髭 宝生大夫 項羽 今春七郎 百萬 金剛三郎 羅城門 観世大夫 世我意 宝生大夫 実盛 今春七郎
通小町 金剛三郎 景清 日吉

⑧慶長十一年八月二日。大御所家康主催能。於京二條城。(『天正以後御能組』)

(一日目)「松風」にツレ日吉出演(観世大夫演)。

⑨慶長十一年八月七・八日。女院御所御能。(『雲上散楽会宴』)

(一日目)「玉井・安宅」にツレ日吉弥右衛門出演(いずれも観世大夫演)。

(二日目)「湯谷」にツレ日吉弥右衛門出演(観世大夫演)。

⑩慶長十二年正月七日より。江戸城移徙の能。(『古之御能組』)

(一日目)翁 観世大夫 千歳 日吉 三番三 長命仁右衛門

⑪慶長十二年二月十三日より。江戸本城にて、観世大夫・金春大夫勸進能。(『古之御能組』)

(一日目)翁 観世左近 千歳 日吉弥右衛門 三番三 鷺仁右衛門宗玄／「難波・江口」にツレ日吉出演(共に観世大夫)。
(二日目)「玉井」にツレ日吉出演(観世大夫演)。

⑫慶長十二年四月十九日。豊国社祭礼能。(『舜旧記』)

申楽能、観世大夫・宝生大夫兩人之立会也、已刻ニ始。

竹生嶋 観世 舟辨慶 宝生 源氏供養 観世 是界 宝生 カンタン 観世 鶴 宝生 キリ弓八幡 観世、但名代日吉大夫、

⑬慶長十三年八月廿七日。両御所様家康秀忠御成之能。駿河浅間にて。四座参集。(『古之御能組』)

翁 観世大夫 千歳 日吉 三番三 鷺仁右衛門

⑭慶長十四年五月一日(駿府御城之能三日目)。若手大夫らの演能。(『古之御能組』)

「自然居士」に日吉出演。(『世我意』に古日吉とあり。)

右のごとく、日吉の出演の記録は全部で僅かに十四例を確認したにとどまる。むろん、日吉出演のすべてを網羅できているとは思わないが、慶長年間にこれだけの数しか確認し得ない、というのはいかにも少なすぎるように思われる。しか

し、これだけでも、同時代の観世座ツレ役者としては、目立った活動ぶりを示している一人なのである。当代のツレとして名の知れた役者には、日吉弥右衛門のほかには、梅若六郎(玄詳)・弥石幾右衛門・同勘大夫・逆水彦三郎などがいて、それぞれ存在を主張してはいるものの、梅若六郎一人を除けば、全く地味な存在にすぎない。日吉と肩を並べるか、或はそれをやや凌駕しているかに見えるのは、梅若六郎のみである。日吉と梅若の両者が、観世座ツレの地位を二分するかたちで勤めているのである。前掲③⑤のごとき両度の將軍宣下祝賀能(但し、③には出演していなくても知れぬ。要調査)を始めとする徳川家康・秀忠関係の興行(⑥⑧⑩⑪⑬⑭)や、両度の女院御所の能(④⑨)などの、大がかりな晴の舞台での観世大夫演能に従って出演しているのは、日吉の存在を十分に示しているし、また観世大夫の名代を立派に勤めている(②⑫、⑦も恐らく大夫の名代であろう)ことも、日吉の地位を証しているようだ。

空庵父の弥右衛門は、生涯を通して狂言役者で、ツレの実績はなく、空庵その人が狂言・ワキからツレへと転じて来たわけで、観世勝右衛門元信がいうように、たしかに、日吉の家は「観世ノ本ツレスヂニテハナ」かった(この点は梅若も同じだが)筈である。にもかかわらず、一代でかかる重要な位置を占めるようになったのはなぜであろうか。この問題については、これまで全く言及しなかった、天正期の日吉大夫の動向や、文禄二年の豊臣秀吉の四座に対する配当米支配の制度の制定発足との関連で、項を改めて見ることにしたい。

なお、右十四例のうち、④⑨⑪では日吉弥右衛門とは何らかのつながりを持つと思われる、日吉姓を名乗る役者が何人か記録しているので、その名前・役名・その他関連事項を列挙しておくことにしたい。

〔ツレ〕 日吉莊五郎正忠、30才(④所見。以下同)。日吉弥七正賢、19才(4)。日吉源治正由、17才(⑨)。日吉四郎兵衛(⑪)。日吉九兵衛(⑨)。

〔ワキ〕 日吉五左衛門栄安、24才(④)。

〔狂言〕 日吉與次郎堅校、39才④。 日吉又右衛門等達、47才④。

〔子方〕 日吉龜之助⑨。 日吉大蔵⑩。

さて、観世座ツレシテとしての日吉弥右衛門の活動は、ほぼ十年間で終ることになる。千歳を勤める日吉の名前は、慶長十三年八月二十七日駿河浅間社での、四座参集の能⑬を最後として以後は見る事ができない。数日前に江戸表から駿府へ来た將軍秀忠が、大御所家康と共に見物、折から家康見舞のため下向していた梵舞にも招かれて見る事ができた。翁を観世大夫(身愛)が、三番三は鷺仁右衛門がそれぞれ勤めている。

日吉がシテを最後に勤めたのは、翌十四年のことであった。四月二十八日から駿府城三之丸で行なわれた能の第三日目(五月一日)に、宝生座を除く若手大夫および各座二線級の役者が顔を揃えて技を競い合ったが、金春七郎・大蔵大夫・今春新五郎・金剛亀千代・梅若大夫らにまじって日吉大夫も参加、自然居士一番を舞ったのである⑭。

右の記事が、慶長年間の日吉の最後の所見である。これより以後は、観世座と行を共にする日吉の名を見ることもなく、『役者目録』が「近代観世座連師手之支」に、日吉の後裔のことを記さず、『萬治元年書上』附載役者付(観世新九郎家文庫)のツレにも日吉は登載されていないことにかんがみ、日吉は観世座から離脱したものと思われる。

日吉が観世座から離れるようになったのは、梅若との確執が生じ、ツレの座を彼に独占されることになった、というような事情によるものではないと思われる。日吉は、恐らく、自分の判断によって座を離れることになったのであろうが、そのきっかけになったのは、秀吉在世中から引き続いて大坂詰を旨としてきた四座に対して、向後は駿府に詰めるようにとの命令が発せられた(十四年三月二十六日付。『當代記』)ことではなかっただろうか。早くから東国志向を示していた観世大夫(そして金春大夫も)と、恐らくはそうではなかった日吉との相違が、結果として日吉の離脱を招来したのではないかと思うのである(日吉の観世座加入の問題と共に考察する)。